

島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS

2010.JUNE vol. 14



夏号

CONTENTS

- 2・3 特別展「茶の湯のものづくりと世界のわざ」特集
- 4 企画展へのいざない
- 5 学芸員通信
- 6 古代文化センターだより
- 7 山陰歴史回廊
- 8 企画展スケジュール



特別展
茶の湯の
ものづくりと
世界のわざ

千家十職 × みんなぱく

- 金物師 中川浄益家
- 表具師 奥村吉兵衛家
- 竹細工・柄杓師 黒田正玄家
- 袋師 土田友湖家
- 土風炉・焼物師 永樂善五郎家
- 茶碗師 樂吉左衛門家
- 釜師 大西清右衛門家
- 一閑張細工師 飛来一閑家
- 塗師 中村宗哲家
- 指物師 駒澤利齋家



2010 7.23 [金] ~ 9.20 [月・祝]

特別展

茶の湯のものづくりと 世界のわざ

せんけ じっしょく
千家十職×みんぱく

千利休より現在に至るまで、茶事のあらゆる道具をつくり伝える京の十家、「千家十職」。

一方、26万点にのぼる世界中のあらゆる「もの」を収集し、研究する国立民族学博物館、「みんぱく」。

千家十職の当代が、膨大なみんぱくコレクションの中から自らの創造をかき立てる「もの」を選び出し、そこから新たなものづくりに挑みました。

この展覧会では、千家十職の歴史を紹介するとともに、新たに制作された作品を、みんぱくの誇る貴重な民族資料とあわせて展示し、人が「もの」から受ける感性の多様性や普遍性を紹介します。

千家十職と世界のものづくりの技と粋、美の創造の源泉をご堪能ください。

*この展覧会は、2009年3月12日から6月14日まで国立民族学博物館（大阪府）で開催された展覧会を再構成したものです。

【千家】表千家、裏千家、武者小路千家
【十家】

- | | |
|---------|-----------|
| 金物師 | ◆ 中川浄益家 |
| 表具師 | ◆ 奥村吉兵衛家 |
| 竹細工・柄杓師 | ◆ 黒田正玄家 |
| 袋師 | ◆ 土田友湖家 |
| 土風炉・焼物師 | ◆ 永樂善五郎家 |
| 茶碗師 | ◆ 樂吉左衛門家 |
| 釜師 | ◆ 大西清右衛門家 |
| 一閑張細工師 | ◆ 飛来一閑家 |
| 塗師 | ◆ 中村宗哲家 |
| 指物師 | ◆ 駒澤利齋家 |

会期

2010年 7月23日[金] ▶ 9月20日[月・祝]

会場

島根県立古代出雲歴史博物館 特別展示室

【主催】島根県立古代出雲歴史博物館、毎日新聞社

【後援】朝日新聞松江総局、共同通信社松江支局、山陰中央新報社、産経新聞松江支局、時事通信社松江支局、島根日日新聞社、新日本海新聞社中国新聞社、読売新聞松江支局、山陰中央テレビ、BSS山陰放送日本海テレビ、NHK松江放送局、エフエム山陰、山陰ケーブルビジョン株式会社、出雲ケーブルビジョン株式会社、ひらたCATV株式会社

【共催】国立民族学博物館

【特別協力】表千家、裏千家、武者小路千家

関連イベント

講演会

「千家十職×みんぱく」の展覧会ができるまで
～博物館を創造に活かす試み～

7月24日(土) 13:30～15:00

講師：八杉佳穂氏〈国立民族学博物館教授〉(当館講義室／100名)

「茶道を支える十職の技 心魅かれる継承の輝き」

7月31日(土) 13:30～15:00

講師：藤間 亨氏〈出雲文化伝承館名誉館長〉(当館講義室／100名)

※電話、FAX、ホームページのイベント参加フォームにて受付。
定員になり次第締切りとさせていただきます。

学芸員の展示解説

担当学芸員のギャラリートーク

7月25日(日)、8月7日(土)、8月21日(土)、9月4日(土)、9月18日(土)。

各日とも①11時～、②14時～。当日会場にて受付。

※参加は無料ですが、特別展観覧券が必要です。

お申し込み・お問い合わせ ●島根県立古代出雲歴史博物館
TEL 0853-53-8600 FAX 0853-53-5350
HP: www.izm.ed.jp

夏休み体験楽

ワークショップ「夏の茶菓、和菓子をつくろう」

和菓子職人さんを講師に招き、夏の和菓子作りに挑戦します。(当館体験工房／定員20名)

8月8日(日)

※事前申し込みが必要です。参加料が必要です。

夏休み(7月～8月)期間中の下記イベントで、特別展にちなんだ催しを行う予定です。

◎夏休み体験楽まつり(7月25日)

◎七夕まつり(8月7日)

◎歴博夏まつり(8月22日)

秋の歴博茶席

歴史博物館にお茶席が登場。一服いかがですか。

◎茶席料：400円(お菓子付き)

(古代出雲歴史博物館エントランス特設茶席)

9月4日(土)・5日(日) 表千家

9月11日(土)・12日(日) 武者小路千家

9月18日(土)・19日(日) 裏千家

※各日10時から16時まで

第1章 千家十職の系譜

千家十職の歴史を、各家当代もしくは先代の作品を中心に展示、紹介します。展示作品約39点。

第2章 世界の手仕事をもとめて



紙人形アレブリヘ (メキシコ)



スティール・ドラム (トリニダード・トバゴ)

「叩く」「鑄こむ」など、11の動詞をキーワードに、千家十職の作品と、みんぱくの民族資料とを紹介し、両者が手仕事という共通点で結ばれることを解説します。展示作品約53点。

第3章 千家十職が挑む

千家十職がそれぞれの審美眼で選び出した民族資料と、これを創作のモチーフとして制作した新作とを比較展示し、十職の技とセンスを御覧いただきます。展示作品約38点。



1



2



6



3



4



5



7



8



9

- 1 メキシコアマテ紙・インドネシアバナナペーパー両面風 炉先屏風 (奥村吉兵衛)
- 2 竹弦楽器結界 (黒田正玄)
- 3 大燈金襴写仕服 (土田友湖)
- 4 青交趾水指 (永樂善五郎)
- 5 盃 アフリカンドリーム (樂吉左衛門)
- 6 妊婦像 (大西清右衛門)
- 7 神代丸食籠 (飛来一閑)
- 8 花文白丸香合 (中村宗哲)
- 9 菓子器 (駒澤利齋家)

企画展「神々のすがた」 — 古代から水木しげるまで —

専門学芸員 岡 宏三

「日本の神様」と聞いて、みなさんはどんなお姿を思い浮かべますか？

ここしばらく、今の日本人が描いた「日本の神様のすがた」を目にするたび、注意して観察してみました。その結果は、衣冠束帯い かんそくたいの貴族の姿、古代の豪族のすがたや、杖つえを持ったアゴひげを伸ばした仙人のすがたが多く、最近のアニメに出てくる神様ともなると、もはやヴィジュアルバンドのメンバー状態。かと思えば、地元の某看板に描かれていたダイコクさんは、括り袴くく ばかまならぬラクダのモモヒキのようなものをはいていて、まことに多種多様。ホトケ様やキリスト様のように固定化されていないのかも知れない、と思いました。

現在の島根では、「神様＝耳たぶのようなミズラを結った古代の豪族」というイメージが圧倒的に多いような気がします。しかし実はこのイメージ、1890年代に東京で提唱されて以降全国に広まったもので、江戸中期から1890年代にかけては、耳たぶ風のミズラの神はほぼ皆無。衣冠束帯スタイルとともに、今風に言えば「ボサボサのロン毛」というヘアスタイルのほうが圧倒的に多かったのです。能楽のうがくにおいても神や鬼、精霊せいれいなどを演じる時は、「赤頭あかがしら」「白頭しろがしら」などとよばれるボリュームのある長い毛をつけますが、神楽などの神様役がつける「シャグマ」もこの系統なのでしょう。

また日本人にとって「神様のすがた」とは、かならずしも人の姿とは限らなかったのです。神社やほこのそばでヘビを見つけると、昔の出雲の年寄りかんは「そりゃ神さんだ。かまうだない」と言ったものでした。あたり知識にまみれた今の私たちよりも、昔の人のほうがはるかに感性が鋭く豊かだったと思います。水木しげる先生が描く神々のすがたは、こうした古来からの感性を継承するものではないでしょうか。

今年の秋、当館では島根県立石見美術館と連携して企画展「神々のすがた」を開催します。

当館では、「古代から水木しげるまで」と題し、古くから現代に至るまで、日本人がどのように神のすがた・かたちを心の中にとらえ、思い描き、表現してきたのかを、神像や絵画などにより紹介し、神々に対する日本人の心性を探っていきたいと思います。我が国の神像彫刻を代表する京都・松尾大社の男神坐像まつのおたいしゃ だんしんざそうや、今回の調査で発見された、摩多羅神またらしんの彫像では最古の年紀を持つ安来市・清水寺の摩多羅神坐像、幕末の鬼才・松本喜三郎の素戔鳴尊すさのおのみこと いきになぎょうの生人形をはじめ、現在東京国立博物館に寄託されている赤穴八幡宮の八幡三神坐像あかな はちまんぐうが13年ぶりにお里帰りされるなど、約100件130点余を一堂に展示します（会期中、絵画は展示替えあり）。

また石見美術館では、「古事記と近代美術」と題し、西洋文化が押し寄せた近代日本において、絵画、彫刻、版画のなかで、日本神話がどのように表現されてきたのかを紹介します。

出雲では、毎年11月（旧暦10月）には八百万の神々がお集まりになるといい、おりしも出雲大社では、現在5年間にもおよぶ平成の大遷宮が進められています。

この秋、神々が集う出雲で、思いを寄せてみませんか？

～古事記編纂1300年～ 2館連携企画展

『神々のすがた』

古代出雲歴史博物館

「古代から水木しげるまで」

10月8日(金)～11月28日(日)

石見美術館

「古事記と近代美術」

9月17日(金)～11月7日(日)

〒698-0022 島根県益田市有明町5-15

(<http://www.grandtoit.jp/>)



新発見の摩多羅神坐像
(鎌倉時代 安来市・清水寺)

神話のふるさと 出雲の博物館めぐり

—「記念日」がとりもつ古代出雲歴史博物館と
展示品ゆかりの地とのネットワーク—

主任学芸員 深田 浩

古代出雲歴史博物館には、展示品にまつわる記念日がたくさんあります。雲南市の加茂岩倉遺跡が発見された日（10月14日「加茂岩倉銅鐸記念日」）、斐川町の荒神谷遺跡で銅剣が発見された日（7月12日「荒神谷銅剣記念日」）、石見銀山遺跡が世界遺産に登録された日（7月2日「銀の記念日」）などなど…。そこで当館では、昨年度から展示品を「記念日」という切り口で紹介する「古代出雲歴史博・〇〇記念日」を始めました。

今年度も、「記念日」にまつわるさまざまなイベントを、ゆかりの地の博物館と連携して行います。例えば、石見銀山遺跡が世界遺産に登録された7月2日「銀の記念日」の前後には、現地の石見銀山世界遺産センターと三瓶自然館サヒメル、そして当館が連携し、“銀”をテーマにイベントや展示、スタンプラリーを開催します。また、青銅器が発見された荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡では、荒神谷遺跡で銅剣が発見された7月12日や銅鐸が発見された7月19日、銅矛が発見された8月18日、加茂岩倉遺跡で銅鐸が発見された10月14日とたくさんの記念日があります。そこで荒神谷博物館と加茂岩倉遺跡ガイドダンス、当館、そして4月に開館した出雲弥生の森博物館の4館では、“銅”をテーマに連携し、スタンプラリーなど記念日がとりもつ期間限定のスペシャルイベントを実施します。

今後もこうした「記念日」ごとに、古代出雲歴史博物館はもちろん、出土地や展示品ゆかりの地を結ぶネットワークを形成し、神話のふるさと・出雲ならではの魅力を全国にPRしていきますので、みなさまも是非イベントにご参加ください！



雲太くん・出雲ちゃん石見銀山世界遺産センターを訪問
(昨年の記念日イベント)



好評だった「国宝の道」シャトルバス
(昨年の7月12日「銅剣記念日」)

“銅”の記念日・4館をむすぶ

“古代出雲浪漫バス”運行決定！

JR西日本が今夏の旅行プランとして企画する『出雲キャンペーン』に連動して、出雲の4つの博物館を周遊する“古代出雲浪漫バス”が運行されることが決定しました。

バスには神話ガイドか学芸員が同乗し、車内で出雲の神話や関連遺跡、博物館などのナビゲートを行います。あなたもバスに乗って、神話の舞台やルーツを探しに出かけてみませんか？

◎バスの運行日：7～9月の土・日・祝日

◎定員：27名

◎料金：1,300円（チケット・博物館入館料込 ※特別展・企画展の観覧料は別料金です。）

◎バスのコースと発着時間（チケットはJR出雲市駅観光案内所・古代出雲歴史博物館・出雲空港内一畑トラベルで販売）

JR出雲市駅（10:20発）→ 出雲大社／古代出雲歴史博物館（10:40着／13:00発）→ JR出雲市駅（13:20発）→ 出雲弥生の森博物館（13:35着／14:20発）→ 荒神谷博物館（14:40着／15:25発）→ 加茂岩倉遺跡ガイドダンス（15:55着／16:25発）→ JR出雲市駅（17:05着）→ 古代出雲歴史博物館（17:25着）

お問い合わせ・ご予約◎出雲空港内一畑トラベルカウンター TEL 0853-72-3200

山陰の「鉄」東奔西走する

古代文化センター 専門研究員 佐伯徳哉

江戸時代から明治時代の初めころ、島根県の出雲・石見地方が全国トップクラスの製鉄地帯＝工業地であったことをご存じでしょうか。現在のイメージからはピンとこないかもしれませんが。当時の中国地方では、豊富な砂鉄と豊かな森林資源によって生み出された木炭を用いて「たたら製鉄」が行われました。これは、現在のような鉄鉱石とコークスを用いた洋式製鉄法が導入される以前の、日本独自の製鉄法でした。

島根県の雲南地域では、その当時、製鉄業を営んでいた家々のうち田部家、絲原家、櫻井家などが、今でも大きなお屋敷と膨大な量の古文書を伝えておられます。古代文化センターでは、ここ2年ほどは、雲南市教育委員会と共同でそのうちの一つ、田部家伝来の古文書の日録づくりを進めています。

さて、出雲や石見で生産された鉄は、江戸時代の終わりに近づくにつれて北前船の発達とともに、鉄問屋があった大阪から近畿はもとより、日本海沿岸から北九州ほか江戸以西を中心にますます盛んに流通しました。例えば、越中（富山県）の高岡では鑄鉄から塩釜にしんがまや鯡釜が鑄造されました。塩釜は主に能登の製塩業者にレンタルされ老朽化すると再び回収してリサイクルされました。鯡釜は蝦夷地（北海道）まで運ばれ、当時大量に獲れた鯡から魚油を抽出し、その残りかすから肥料をつくり、これらがまた北前船に乗って本州へと運ばれました。越後（新潟県）の三条では、山陰方面から船で送られ新潟から陸揚げされた鉄材をもとに農具類・大工道具類や和釘類を生産して、これらを今度は陸路山越えて関東方面へと出荷していました。特に、鋏いさぐなど農具の刃先に出雲産の鋼を用いる製法が考案され優秀な製品が作られるようになったということです。

一方、軍需でも用いられました。

江戸時代には近江国国友村（滋賀県長浜市内）の鉄砲鍛冶に、櫻井家から出荷された鉄砲鉄（長方形の板状の鉄）が用いられ、かの有名な国友砲が作られました。

幕末になると、日本の近海に外国船が出没し、嘉永6（1853）年、ついにペリーが軍艦を率いて浦賀に来航して開国を迫るや武器需要が急増しました。当時の日本国内の慌てようは、NHK大河ドラマの「龍馬伝」にも見えたとおりです。特に、巨大な洋式の鑄鉄製大砲を、佐賀藩・薩摩藩や幕府（伊豆韮山代官所）が反射炉という西洋式の溶解炉を用いて鑄造し始め、江戸湾のお台場・鹿児島城下沿岸の砲台いのみずくに据えつけ始めます。少なくとも当初佐賀や韮山で用いられたのが「石見鉄」といわれる石見産の鉄で、鑄鉄のブランドでした。佐賀藩は、幕府から大砲製作を委託されたこともあり、鉄を幕府の直轄領であった石見銀山領から直接手に入れました。これを皮切りに、幕府の伊豆韮山反射炉でも、大阪の問屋経由で何十トン単位で石見産鉄が調達され、続々と伊豆下田・沼津の港から陸揚げされました。さらにその流れでしょうか、水戸藩的那珂湊反射炉でも、当初は石見産の鉄が最もよいとされました。一方、島津斉彬が藩主であった薩摩藩では、藩内に鉄山が発見されるや、石見から鋼吹きくわぶきの技術者をスカウトして呼び寄せました。

出雲や石見のたたら鉄も東奔西走し形を変えて歴史を動かす重要な要素になりえたわけです。しかし、江戸時代の終わりから明治にかけて、たくさん作られたであろう鉄製品は、現在、あまり残っていません。リサイクルされてしまうからです。展示品を捜す学芸員の悩みは尽きないのです。



伊豆韮山反射炉（幕末）



国友鉄砲鍛冶の屋敷（滋賀県長浜市）



現在でも鑄物業が盛んな高岡市金屋町

「さんいんさんぽ」

～邑南町郷土館と瑞穂ハンザケ自然館/邑南町～

邑南町は島根県のほぼ中央、邑智郡の南部に位置し、町の南と東は広島県と接する県境に所在します。今回は中国地方の山間の地から、江川支流出羽川沿いにある二つの学習施設について紹介いたします。

【邑南町郷土館】

昭和62年にオープンした施設で、町内から収集した民具資料（約1200点）、採取した化石・岩石資料（約400点）、出土した考古資料（数万点）、文書類（約600点）等の収蔵及び展示を行っています。

考古遺物の展示室には、町指定文化財の「荒槇遺跡出土旧石器」・「江迫3号横穴墓出土金属製品」・「長尾原遺跡出土土馬」をはじめ、「ドンデ遺跡出土の有茎尖頭器」や「中山古墳群B-1号墳出土の方形板革綴短甲」、^{のぶしぼら}「野伏原古墳出土三累環頭大刀」などが常設展示されています。

また、町内では古代から近代にわたる製鉄関連遺跡が確認されており、「出羽鋼」という名称も本町の地名に由来します。郷土館の別棟には町指定文化財の「天秤ふいご」などの展示もあります。

郷土館の隣には国の登録文化財の「旧田所小学校講堂」があります。昭和3年建築の入母屋の大屋根を架す典型的な小学校講堂建築です。

さらに郷土館から約1kmの範囲内には、県指定文化財の「順庵原1号墳（墓）」や「瑞穂ハンザケ自然館（学習施設）」があります。

なお、この夏開催の「弥生の森博物館（出雲市大津町）」の開館特別展『弥生人の彩エンス—出雲王が愛した色—』に、町指定文化財の「順庵原1号墓出土ガラス製玉類と舟形土製品」の内、ガラス製小玉（59個）と順庵原遺跡出土のヒスイ製勾玉が出品されますので、この機会にぜひご覧ください。



邑南町郷土館



天秤ふいご

【瑞穂ハンザケ自然館】

「ハンザケ」とは「オオサンショウウオ」の地方名で、頭部の半分くらい口が裂けているように見える様子から、愛着を込めてそう呼ばれています。邑南町民にとっては身近で親しみのあるオオサンショウウオですが、世界的にみると日本及び中国やアメリカの一部にのみ生き残っているいわゆる生きた化石であり、世界最大の両生類であることから、国際希少野生動物種及び国の特別天然記念物に指定されています。



オオサンショウウオ



瑞穂ハンザケ自然館

彼らの生息環境を理解

するとともに、町の豊かな自然や文化、動植物等の積極的な保護と活用を図るため平成12年にオープン。国の許可を得てオオサンショウウオ（体長115cm、体重11.6kgほか）を飼育展示しています。また、町指定文化財の「オヤニラミ（地方名：トウザブロウ）」など、町内河川に生息する川魚なども飼育展示しています。

ハンザケ自然館には学習施設のほか、観察園路や観察施設があり、自然観察会等を開催しています。

邑南町郷土館

〒696-0223 島根県邑智郡邑南町下亀谷210番地
TEL 0855-83-1127(邑南町教育委員会生涯学習課)

※入館無料ですが、事前にご連絡ください

瑞穂ハンザケ自然館(学習施設)

〒696-0224 島根県邑智郡邑南町上亀谷475番地
TEL 0855-83-0819

休館日●月曜日及び祝祭日の翌日

入館料●大人300円(200円)・小人150円(100円)

※()は団体料金、20人以上

[特別展] 茶の湯のものづくりと世界のわざ

千家十職×みんなぱく 2010年7月23日[金]—9月20日[月・祝]

古事記編纂1300年
712年～2012年

企画展

この秋、出雲で
神々に出会う

神々のすがた

古代から水木しげるまで

2010年10月8日(金)—11月28日(日)

古来日本人は、神を目に見えない人知の及ばない超越した存在と捉えていました。それ故人々は、神像や絵画など神を具象化する上で絶えず模索を繰り返してきました。

本展覧会では、古くから今日まで日本人がどのように神のすがた・かたちを表現してきたかを神像などの展示を中心に、神々に対する日本人固有の心性を探ります。そして『ゲゲの鬼太郎』で知られる漫画家水木しげる氏が捉えた神々の姿も紹介します。

[特集展]

出雲平野の弥生時代

—調査研究成果の最前線—

2010.12.17[金]

から

2011.2.14[月]

※展覧会名は仮称です。

古事記編纂1300年 企画展
712年～2012年

古代出雲の壮大なる交流

神々の国を往来した人と文物

2011年3月4日[金] ▶ 5月16日[月]

日本列島各地に分布するオオアナムチ(=オオクニヌシ)に関わる神話伝承や出雲氏という氏族の分布形態から、島根県の出雲地方に限定されない出雲文化圏の実態を明らかにする。また、相撲の元祖とされるノミノスクネの伝承成立の歴史背景として、畿内から出雲へと至る多様なルートを明らかにし、そのルートにのってどのような形で人・モノ・情報が往来したのか、その具体像を明らかにする。

発行/平成22年6月



島根県立古代出雲歴史博物館
Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL.0853-53-8600(代) FAX.0853-53-5350
URL: <http://www.izm.ed.jp> E-mail: contact@izm.ed.jp
開館時間 9:00~18:00(11月~2月は、9:00~17:00)



マスコットキャラクター
雲太くん



マスコットキャラクター
出雲ちゃん